

修道士ロベール、イタリアの人文主義者たち、

クレルモンの宗教会議（一〇九五年）*

ゲオルク・シュトラック

渡邊裕一 訳

一〇九五年一月一八日から二八日にかけて開催されたクレルモンの宗教会議において、教皇ウルバヌス二世は教会改革を目指した一連の教令を発しました^①。しかし、後世の人々の関心をはるかに大きく集めているのは、会議最終日の前日（一月二七日）に教皇が行った十字軍演説のほうでしょう。本稿でもクレルモンでの十字軍演説を取り上げますが、これは教皇と戦士たちとの直接的なコミュニケーションションであったと一般に解釈されています。これまでの（十字軍）研究は、数えきれないほど多くの人々がウルバヌス二世の説教を聞くために市壁外の野原に集まる場面から説明を開始するものがほとんどです^②。教皇は、東方でキ

リスト教徒たちを抑圧しているムスリムの残虐さについて熱心に語り、とくにエルサレムが置かれた窮状について詳述します。ムスリムに対して軍事的な行動をとるようという教皇の要求に対し、聴衆たちは「神が欲し給うた」という戦の叫びでもって応じます。教皇の呼びかけに対する反響の大きさがここに印象的に示されています^③。

十字軍演説についてのこのようなイメージは、以下の論述のなかで修正されることになるでしょう。多くの点において、このようなイメージは、ただ一つの史料、すなわち修道士ロベールの『エルサレム史』(*Historia Hierosolimitana*) のみに由来しています^④。この年代記に

ついでには、刊本はあるものの、批判的な校訂作業は十分に行われておらず、この歴史書が依拠した原本の有無や継受のされ方についてはほとんど知られていません^⑤。そこで以下では、まず『エルサレム史』と、この年代記が参照した史料について取り上げます。続いて、一五世紀の半ばにこの十字軍年代記と深く関わった二名の人文主義者、すなわちフラヴィオ・ビオンドとベネデット・アッコルティに焦点を当てます。論述を進めるなかで、二つのことが明らかになるでしょう。第一に、修道士ロベールはクレルモンの宗教会議について実際に目撃したままに記録を残したわけではなく、先行する一連の史料を参考にしながら、それに自由に手を加えていったということ。第二に、人文主義的な歴史家たちが、ロベールの語りを継承し、さらに尾ひれをつけて脚色することで、現代に至るまでの十字軍演説の評価に大きな影響を及ぼし続けているということ、の二点です。

一

修道士ロベールについて知られていることは多くありません。おそらくスニユクにある聖オリクル修道院の院長であったとされていますが、一時期ランスにある聖レミ修道

院の修道院長の職にあったとも推測されています^⑥。『エルサレム史』が執筆されたのは一一〇六年頃だと考えられています^⑦が、執筆時期を一一一〇年以降とみなす説もあります。修道士ロベールは、この年代記に二つの前文を付けており、十字軍演説を解釈するうえで重要な意味を持ちます。まず、「弁解の辞」(*sermo apologeticus*)において、本作品の不十分な言語力について弁明し、ある修道院長から年代記の起草を催促されたためであると説明します^⑧。ロベールが文体としてはほとんど魅力のない「歴史」(*historia*)——ほぼ間違いなく『フランク人の事績』(*Gesta Francorum*)であると考えられます——を下敷きにしてそれに手を加えていったことが読み取れます^⑨。

修道士ロベールはこの改訂作業に自分が適任であると主張します。その理由は、『事績』には言及のないクレルモンの宗教会議に彼自身が参加していたからであり、そのためロベールは、文章を文体としてもより良いものに改訂するだけでなく、それに相応しい幕開けを飾ることのできる立場にあるということです。自身の名前と年代記を作成した場、すなわちランスの聖レミ修道院の配下にあった修道院の名前を記した後に、文字通りの「プロローグ」(*prologus*)が続きます。ここでロベールは、なによりも神に対する人々の期待を強めたいという望みを表明します。それに貢

修道士ロベール、イタリアの人文主義者たち、クレルモンの宗教会議（一〇九五年）（シュトラック）

献することがこの歴史書の使命であり、そのためにこの年代記は聖書の（救済史的な）歴史叙述の伝統のなかに位置付けられます。「真実」(*nisi quod verum*)を伝えるという常套句的な言い回しも、救済史的な真理に関連付けて考へることができません。十字軍の成果は目に見える形で神の啓示であり、その過程において、フランク人たちは単に軍事的に成功を収めただけでなく、選ばれた民（『詩篇』三二、一二）であることを証明したとされます。これについては後ほど取り上げましょう。本文の叙述は、直接クレルモンの宗教会議の説明から始まります。『フランク人の事績』に改訂を加えた者たちのなかで、教皇と枢機卿が「ガリア」(*Gallia*)と「ゲルマニア」(*Germania*)から集まった司教および諸侯たちとクレルモンで会議を開いたことを伝えているのは、修道士ロベールだけです。

また他に例を見ないのは、教会関連事項を決議した後にウルバヌス二世が十字軍演説を行った場所についての言及です。多数の聴衆を収容できるほど十分な大きさの建物が無かったために、演説は市内の大きな広場か、あるいは広い大通り (*spaciose latitudinis platea*) で行われたと記されています。演説は、先に言及した宗教会議に集まった聖職者および貴族たちだけでなく、全ての「フランクの民」(*gens Francorum*)に向けてなされました。この言葉が、

ガリアだけではなくゲルマニアからの参加者も、また聖職者ばかりでなく戦士たちをも含意していることは明らかです。さらに言えば、女性たちを含んでいた可能性もありますが、女性の十字軍参加については、このロベールの年代記でだけ言及されているにすぎません。ウルバヌス二世は、まずトルコ人たちの軍事的な脅威とその身の毛もよだつような残虐行為の数々をすべての聴衆たちにむけて披歴します。かつてフランク人たちは、彼らの先祖であるカール大帝やルートヴィヒ敬虔帝のように、それに立ち向かってきました。この教訓話と並んで、なによりトルコ人たちは、「贅沢な第二の楽園」(*quasi alter paradisus deliciarum*)と呼ばれるエルサレムに突然姿を現し、聖地に相応しくない行為を犯そうとしていると語られます。ここで教皇は、擬人化された都市に比喻を用いて巧みに助けを請わせることで、レトリカルに話を盛り立てていきます。教皇は、聖地と比べ、土地の不足と分割争いが蔓延し、さっぱり好ましくない生活環境が支配している西側の状況を嘆きます。演説は、教皇が世俗的な利益、そして、そのあとに言及される贖宥 (*remissio peccatorum*) という精神的な利益を約束したときに最高潮に達します。ウルバヌス二世が贖宥について触れると、聴衆たちは「神が欲し給うた」(*Deus vult*)と叫び、そのもくろみに熱狂したことを態度で示し

ます。そして、この叫びは、二度にわたって引用されるのです。

演説を再開し、十字軍の参加者たちに関するいくつかの規定を告知するために、ウルバヌス二世は身振り手振りではなく群衆を落ち着かせます²¹⁾。ここで教皇が直接語り掛けているのは明らかに戦士たちであり、冒頭で言及された司教たちはことさら受け手として想定されていません。まづ教皇は、神に促されて聴衆たちが発した「神が欲し給うた」という叫びを、「戦いの合言葉」(militare signum)に指定します。彼は、裕福な者たちには貧しい者たちを援助するよう求め、十字軍の参加条件としては、基本的に老人と病弱な者だけを排除するという決定を告知します。俗人は司祭による同意 (benedictio) が必要であり、聖職者は各々が属する司教からの許可 (licentia) を得るべしと定められました²²⁾。女性たちは、夫や兄弟らと一緒にならば、あるいは正当な法的証明 (legitima testimonia) を携えていれば、参加することが許されました²³⁾。この点は、説教の解釈としてしばしば誤読されている点です²⁴⁾。終わりに教皇が祝福の言葉を述べ、宗教会議は散会します。俗人たちはすぐにクレルモンを立ち去りますが、ウルバヌス二世は司教たちともう一度会合をもち、誰が十字軍を指揮すべきかについて相談します。目ぼしい世俗の諸侯たち (nominatus

princeps) がいなかったために、聖職者の指導者ル・プイ司教が十字軍特使としてこの作戦を率いることを全会一致で決定します²⁵⁾。

『エルサレム史』における宗教会議の記録は、研究史上も大きな関心を集めています。というのも、ここでウルバヌス二世がムスリムに対する戦いの直接のきっかけを戦士たちに与えており、この史料を参照することで、十字軍を比較的容易に説明することが可能となるからです²⁶⁾。彼の説教が引き起こしたとされる「敬虔なエクスタシー、あるいは集団ヒステリー」は、演説が終わる直前で「神が欲し給うた」という叫びとともに爆発します²⁷⁾。この史料は、幅広い読者向けの一般書のなかでも、繰り返し翻訳されてきました。どうやらこの史料は、関心を持つ読者に、直接「クレルモンの広場」で「参加者たちの興奮」を目の当たりにすることを可能にしてくれるかのようです²⁸⁾。一般的な叙述とならんで、学術的に一定の水準にある研究書でもまた、『エルサレム史』から比較的長い文章が好んで引用されています²⁹⁾。以下では、十字軍の呼び掛けの内容だけでなく、その「修辞上の形式」についても見ていきたいと思います³⁰⁾。

『エルサレム史』における十字軍の呼び掛けの「形式」は、古代の伝承のなかの軍総帥のようなウルバヌス二世の

修道士ロベール、イタリアの人文主義者たち、クレルモンの宗教会議（一〇九五年）（シュトラック）

口ぶりからして、まことに注目に値します⁽¹⁾。教皇が「神が欲し給うた」という叫びを戦士たちの合言葉に決定したところ―それはまさに軍指揮官の専権事項です―は、まことに軍総帥の役にふさわしいと言えるでしょう⁽²⁾。計画されている戦いは、キリスト教徒たちが自身の領土を攻められていくからこそ「正戦」(bellum iustum)であるとされますが、これは軍総帥風の演説でいつも見られる正当化です。戦士たちの感情を高ぶらせるために、教皇は直接彼らに語りかけ(O fortissimi milites…)、敵方の悪行を詳述します。この年代記で教皇は、祭壇を汚されたことに触れるだけではなく、言語道断な残虐行為についても描写します。

彼らはキリスト教徒に割礼を施し、その割礼の血を祭壇の上にかけて、あるいは洗礼盤のなかに注ぎ込む。彼らは、彼らが乱暴し殺戮しようと定めた人々の腹を裂き、腸を引っこ抜いて、その先端を柱に結び付ける。そして、内臓がすべて出尽くして、その者が地面に倒れこんでしまうまで、鞭で打って柱の周りをぐるぐると追い立てまわす⁽³⁾。

戦士たちのモチベーションにとって欠かせないのは、なんと言っても豊かな戦利品の約束であり、ここでは他のど

の年代記にも勝ってこの点が強調されています。聖地は豊かな土地であり、そこには「乳と蜜」（『出エジプト記』三、八）が流れています。自分たちの国では人口を満たすための十分な土地がなく絶えず分割争いに明け暮れているフランス人たちは、罪深いムスリムから聖地を奪還しなくてはならないのです。戦士たちに向けられた何度も繰り返されるアピールは、軍総帥風の演説ではお決まりの常套句であり、祖先による勝利の想起もまた同様です。すでに言及したように、ウルバヌス二世は、異教徒の諸王国を破壊し教会の影響圏を拡大させたカール大帝とルートヴィヒ敬虔帝の「誠実さ」(probitas)と「偉大さ」(magnitudo)をお手本にするよう語っています。この教会の長は、ガリアとゲルマニアから集まった大衆にむけて語っているのですから、模範例として挙げる人物もうまく選ばれていると言えるでしょう。というのも、双方の集団とも、自分たちと模範例を同一視することが可能だからです。

これまでも『エルサレム史』の宗教会議の記録のなかにあるカール大帝の例話については多くの議論がなされてきました⁽⁴⁾。しかし、『フランク人の事績』との密接な関係についてはいまだ十分に考察されていません。『事績』でも同様に、物語のはじまりでこのフランクの支配者が十字軍戦士にとっての「道標」として描かれています。すなわち、

ゴドフロワ・ド・ブイヨン指揮下の部隊は、カールが基礎を築いた道の上を東方へと向かったのです。『エルサレム史』のその他の特徴についても、同様に『事績』を引き合いに於いて説明することが可能です。例えば、導入部における戦士たちに対する「フランクの民」——これによりガリアとゲルマニアが等しく意味されています——という呼びかけなどです。これは、フランスと帝国からの十字軍参加者たちが「フランク人」(Franci)として区別されることなく描かれる原テクストの言葉使用とも一致します。フランク人への賞賛は、『詩篇』(三二、一二)にしたがって「フランクの民」を神に選ばれた民として描いた本書のプロログからロベール自身が借用したものでしょう。それとは逆に、十字印の付着との関係で想起されるキリストのまねびのモチーフは、再び『フランク人の事績』から着想を得たものと考えられます。

同じことは戦いの叫び「神が欲し給うた」にも当てはまります。この叫びは、ロベールが手本とした『事績』のなかで初めて記録されたものですが、それは全く異なる文脈においてでした。『事績』でこの叫びを発したのは、フランス系ノルマン人たちであり、十字軍遠征軍の一部隊であった彼らが、一〇九六年に北イタリアに到着したさいのことでした。これに関する『事績』の描写は、戦士たちのこ

の叫びを最初に古フランス語 (*Deus lo vult*) で記録したモンテ・カッシーノの修道院年代記の記述とも一致しています——ここでも同様に、クレルモンへの言及はまったくありません。研究が好んで示唆しているにもかかわらず、中世の年代記で宗教会議における俗語での叫びを記録したものは見つかっていません。ランスの修道士ロベールが「神が欲し給うた」という戦いの叫びを宗教会議の場面に挿入したことにより、クレルモンの宗教会議は十字軍の成立にとって決定的に重要な役割を果たしたという評価を獲得したのである。この叫びは、教皇と戦士たちとの直接的なコミュニケーションの成果を際立たせるものであり、『エルサレム史』がクレルモンの集会について描き出す全体的なイメージにも合致しています。

修道士ロベールは、ウルバヌス二世の十字軍演説をでっちあげるさいに、『フランク人の事績』の他にもいくつかの書簡を援用したと考えられます。すでにハインリヒ・ハーゲンマイヤーは、ウルバヌス二世のフランドルに宛てた所謂「十字軍書簡」(*Kreuzzugsbrief*)との間に一定の一致箇所が存在していると指摘しています。この書簡にも書かれているとおり、教皇は演説のなかで、トルコ人の行軍となによりも教会に対する彼らの残虐行為 (*rabies barbarica*) についての報告 (*relatio*) を話題にし、そ

修道士ロベール、イタリアの人文主義者たち、クレルモン^①の宗教会議（一〇九五年）（シュトラック）

れがフランスへの旅のきっかけとなったと語っています^②。「聖なる都市」(sancta civitas)におけるキリストの受難と復活というおおげさな説明も、十字軍の贖罪を「贖宥」(remissio peccatorum)とし、教皇特使を「君主 dux」と呼ぶ言葉使いと同様に、ある意味で書簡の内容に対応しています。さらに明らかなのは、そのほかの書簡、例えば「アレクシオスの手紙」(Epistola Alexii)からの逐語的な引用です。真偽が疑わしいビザンツ皇帝からのこの救援要請は、一一〇六年頃からフランスで出回っており、同時代のその他の歴史家にも引用されています^③。ランスの年代記は、この手紙から、割礼の血で祭壇や洗礼盤が汚される様子やムスリムによるとくに強烈な残虐行為についての記録を引用したものと考えられます。くわえて、演説の別の文章も、構造的に「手紙」の内容に対応しています。どちらのテキストでも、女性への暴力行為という（ロベールがただ暗示しているだけの）話題の後に、キリスト教徒の領土の喪失について詳述され、その後信仰の敵に対する戦いの訴えと歴史的な模範の想起が続いて語られているのです^④。

また、エルサレム総大司教の手紙（一〇九八年一月）と一定の共通点も観察されます。ここでは、ロベールの年代記と同様に、エルサレム解放の要求が、擬人化された形で述べられています。都市エルサレムは、聖書からの引用

により、乳と蜜（『出エジプト記』三、八）が流れる豊かな土地として特徴づけられ、まことに簡潔な形ではありませんが、女性の十字軍参加の制限もすでに総大司教の手紙のなかで語られています。総大司教の手紙と「アレクシオスの手紙」は、しばしば『エルサレム史』と一緒に伝来しており、長い間「アレクシオスの手紙」と一一〇六年頃に書かれたこの十字軍年代記が同じ歴史的な文脈のなかで、つまりフランスのノルマン人ボヘムントが東方への遠征軍を募り、身分の高い者たちからの援助を見出したとき「国王フイリップ一世は、自身の娘をボヘムントに妻としてささげています」に作成されたものと考えられてきました^⑤。この見解に対し、新しい研究は、『エルサレム史』を聖レミ修道院の宮廷に近い歴史叙述であったとみなしています。ボヘムントの十字軍遠征が失敗に終わったのち、修道士ロベールは、第一回十字軍の成功を思い起こさせることで、この国王一族の敗北を過去のものにしようとして試みたということです。

『エルサレム史』が将来に向けて、あるいは過去の克服を目指して作成されたとしても、どちらにせよ確かなのは、きわめて効果的なこの宗教会議の記録がこの語りの拡散に大いに貢献したことです。全部で八四にも及ぶ写本が、フランス、ドイツ、イタリアに保管されています^⑥。とくに、

フランスおよびドイツのシトー会修道院に伝来している写本の数が一一四〇／五〇年頃に著しく増加しており目を引きます。シトー会修道士たちは、当時、十字軍遠征の勧誘に尽力しており、このことは、なぜこの年代記が、その他のプロバガンダ文書（「アレクシオスの手紙」や総大司教の手紙）とともに伝来しているのかを説明してくれれます。修道士ロベールの語りは、比較的理理解しやすいうラテン語で書かれており、ウルバヌス二世の演説だけではなく、わかりやすく、感情に訴えるのに効果的なイメージを含んでいます。そして、それは俗語の十字軍説教にしっかりと受け継がれていきます。一一八九年に皇帝フリードリヒ・バルバロッサに献呈された年代記の写しには、第三回十字軍の募兵と軍の組織化のために尽力するようという指示がみられます。一四世紀の初めの数十年間に、新たな十字軍のために兵士を募ったヴェネツィアのマリノ・サヌード・トルセロもまた、『信仰深い十字軍に関する秘密の書』(Libra secretorum fidelium crucis) のなかで、修道士ロベールの宗教会議の記録を引用しています。

『エルサレム史』は、十字軍募兵のために一貫して利用された一方で、狭義の歴史編纂の分野では、しばらくの間ほとんど反響を得ることはありませんでした。知られている限りでは、一一四〇年代にエルサレム王の委託で『ニケ

ーアあるいはアンティオキアの歴史』(Historia Nicæna vel Antiochena) を書いた無名の歴史家に、叙述の基礎的な情報を提供したくらいでしょう。この無名氏は、ウルバヌス二世の十字軍演説を短縮し、教皇に「フランクの民」に向けて説教させるのではなく、修道士ロベールの年代記でも主たる語り掛けの相手であった戦士たちに向けて語らせています。

二

歴史編纂の分野における『エルサレム史』の快進撃は、時間的にも空間的にも、実際の出来事から遠く離れた一五世紀イタリアの人文主義のなから始まります。ロベールによる宗教会議の記録の基本的な視点を広く流布させたのは、フラヴィオ・ビオンドの『数十年の歴史』でした。教皇の書記官であったビオンドは、一四五三年までにこの作品を完成させ、そのなかでクレルモン宗教会議について詳述しています(2. Dekade, Buch 3)。修道士ロベールの年代記について、彼は二つの手書き写本を詳しく検討し注解まで施しており、そのために教皇の十字軍演説の意味付けも似通ったものになっています。

ランスの年代記作家の場合と同じように、フラヴィオ・

修道士ロベール、イタリアの人文主義者たち、クレルモンの宗教会議（一〇九五年）（シュトラック）

ピオンドの記録でも、教皇は宗教会議に参加した高位聖職者たち (*patres*) にも語り掛けてはいるものの、実際の呼び掛けの対象となっていないのは戦士たちです。この人文主義者は、『エルサレム史』の設定をさらに拡大させ、聴衆たちがガリアとゲルマニアからだけでなく、全キリスト教世界からやってきた (“*ex omni orbe Christiano multitudine ad concionem uocata*”) としています。また聴衆の一団もいくぶん均質的な集団として描いており、ここでウルバヌス二世が語り掛けているのは、(女性も含めた) 「フランクの民」ではなく、キリスト教徒の男たち (*uiri Christiani*) であることは明らかです。彼らに対し教皇は、ランスの年代記と同様に、まずは宗教会議の目的 (*causa*) について説明しますが、その内容は修辭的に誇張され、駄文になり果てています。これに関しては、『エルサレム史』での残虐行為についての記述が受け継がれているものの、(男性の) キリスト教徒に対する攻撃については、ほんのわずかに触れられているにすぎません。その一方で、女性に対する暴力は原テクストよりもさらに徹底的に描かれており、例えば、ウルバヌス二世は考えられるかぎりのあらゆる虐待行為に曝された女性の巡礼者について詳しく語っています。ピオンドは、教皇に、このような不法行為にしっかりと対抗するよう呼び掛けの言葉を口にさせていますが、

これがキリスト教徒の男たちに向けられていることは明らかです。教皇は、さまざまな民族・言語グループ、すなわち北方 (*Germani, Saxones*)、東方 (*Poloni, Bohemi, Hungari*)、南方 (*Itali, Veneti, Dalmatae, Histri et alii sinus Adriatici accolae*)、そして西方 (*Galli, Hispani, Aquitani*) からの聴衆たちに対し、それを求め、押し寄せてくるムスリムに警戒するよう訴えます。

ビザンツ帝国の厳しい状況については、すでに修道士ロベールも言及していましたが、ピオンドはこれをさらに切実な問題として捉えています。ギリシャの皇帝帝国が陥落してしまえば、ヨーロッパが攻撃にさらされるのも遠い話ではなくもはや安泰ではないと警告を発していますが、これは一四五〇年頃の対立状況を反映したものです。カール大帝の例話も、ロベールの叙述を土台にして、『数十年の歴史』ではさらに、さまざまなヨーロッパの諸民族 (*Germani, Franci, Hispani, Aquitani*) とこの統治者との関係がより詳細に解説されています。カールは、これらの諸民族の領域からだけでなく、イタリア、聖地、エルサレムからもサラセン人 (*Saraceni*) を追い払ったとされていますが、これは、ピオンドが古代およびキリスト教時代におけるローマの拡大を参照し、人文主義的な作法に則ってカールの例話を誇張した結果です。最後に

ウルバヌス二世は、すべての者に武器を手にとるよう呼び掛け、その代償として世俗的な報いにくわえ、精神的な報い (*praemia*) が与えられると約束します。エルサレムは、乳と蜜が流れる土地として描かれており、『出エジプト記』三、八) の点は『エルサレム史』の設定と共通しています。「神が欲し給うた」の叫びで教皇の演説が遮られる件も同じですが、ピオンドはこの点にさらに手を加えています。聴衆らに二度だけでなく三度四度とこの叫びを繰り返させることで、劇的な演出を付け加えたのです。叫びがどうにも止みそうになかったため、ウルバヌス二世は、再び静粛を得て演説を再開するのに若干の苦勞を要しています。教皇は、この叫びの言葉を戦いの合言葉とすることにし、それをウエルギリウスの言葉を借りて「関の声」(*tesser*) (『アエネーイス』VII 637) と呼んでいます。服に十字の布を縫い付ける要求についても、ピオンドはランスの年代記に依拠しています。ここで教皇が語り掛けているのは明らかに男性であり、修道士ロベールが述べる女性の十字軍参加の諸規定については引き継ぐ必要もありませんでした。

史苑(第八一卷第一号)

感動的な十字軍説教を中断させたというイメージは広く普及していきました。後世の歴史叙述は、しばしばこの作品に依拠していますが、それは彼らが数多くの写本、インキユナブラ、そして初期印刷本の形でこの作品に自由にアクセスできたためです。一四六三年頃に完成し、さらに広く普及したピウス二世による要約版(『抄録』(*Epitome*))では、ウルバヌス二世の十字軍説教は、短縮の犠牲となり削除されているものの、この教皇がそれを注意深く勉強したことがうかがい知れます。ピウス二世は、マントヴァの諸侯会議でトルコ戦争のための兵士を募ったとき、クレルモンでは熱狂した「神が欲し給うた」の叫びがこだまするのに多くの言葉は必要なかったことを集まった人びとに思い起こさせています。

ピオンドの「宗教会議の記録」が一五世紀末〜一六世紀の人文主義者に及ぼした大きな反響についてこれ以上立ち入って考察することは、本稿の枠を超えることになりましょう。ここでは、今日でも驚くほどの影響力を持つ作品を一つだけ挙げておきたいと思えます。フィレンツェでメディチ家の尚書局に勤めたベネデット・アツコルティが一四六三年頃に書いた『ゴドフロワの歴史』(*Historia Godefredi*) です。重要な典拠となった史料は古フランス語の『ヘラクレスの歴史』(*Estoire d'Eracles*) ですが、

ここでは十字軍の呼び掛けについての記載はほとんどありません⁽⁸⁶⁾。したがって、このフィレンツェの人文主義者は、他の史料をも参考にしていたはずですが、これまで注目されることはありませんでしたが、その一つが『数十年の歴史』であったと考えられます。例えば、キリスト教教会の世俗化についての苦情などは、フラヴィオ・ピオンドに依拠したものとと言えるでしょう⁽⁸⁷⁾。とくに注目すべきは、キリスト教徒と男性一般に向けてなされた呼び掛けの受容です。ビザンツ帝国のおかれた厳しい現状についての説明も内容的に似通っています⁽⁸⁸⁾。さらなる類似点は、神の援助の約束がかわされる場面でも見出すことができます。どちらの版でも、贖宥は「贖罪」(praemia)と表現されています⁽⁸⁹⁾。

宗教会議の記録についてアツコルティが依拠した重要な史料は、周知のごとく、修道士ロベールの年代記ですが、より正確に言えばマリノ・サヌード・トルセノの短縮版だとされます⁽⁹⁰⁾。『ゴドフロワの歴史』で教皇は、修道士ロベールの年代記とは異なり、学者風に論拠を示しながら、イスラム教の拡大によって引き起こされる危険について、聴衆たちにわかりやすく手ほどきします。人文主義者たちの作法に則り、教皇は古代の歴史を詳細に参照しながら、当時のキリスト教の迫害を比較的悪意のないものとして描きます⁽⁹¹⁾。それがいまでは、聖地とイエスの墓がムスリムの

手に落ちてしまい、巡礼も高額な支払いと引き換えになんとか許される状況にあると述べられます。『エルサレム史』に依拠して、キリスト教徒に対する強制割礼が行われていたという話題にも触れられていますが、ここでは一論拠としてはほとんど何の役にも立たないユダヤ人の伝統と絡めて理解されています。教皇は、このような恥すべき悪行に対して行動を起こすよう聴衆に訴えかけます。記述はどちらかというと客観的で、正戦(bellum iustum)の理由が詳しく述べられ、十字軍の正当性が強調されています。抽象的な議論ののち、ウルバヌス二世は、公衆に対して、具体的な徳と名譽の感覚に訴えかけ、彼らにキリストと自分たちの先祖たちを模範とするよう説きます。戦場での演説で慣例となっているように、教皇は誓いによって確かな勝利を約束し、敵の弱さと神の助力により根拠づけられる希望を語ります。最後に彼は、主張の論拠を再び整理し、十字軍が故郷、家、家族を防衛するための行為であり、そのうえ自身の魂の救済にも役立つものであると宣言します⁽⁹²⁾。

ベネデット・アツコルティは、修道士ロベールの形式と題材を借用していますが、演説の劇的な要素は明らかに薄められています。血なまぐさい詳細について語る代わりに、『ゴドフロワの歴史』の教皇は、古代史まで立ち戻り、

正戦 (*Bellum iustum*) や聴衆の徳の高さに訴えかけています。このフイレンツェの人文主義者は、宗教会議の記録から「神が欲し給うた」の叫びを削除し、ただ賛同するつづきと聴衆たちによる互いの注意喚起について言及するに留めます。しかし、一つの点においてだけ、彼は修道士ロベールの設定を超え、その演劇性を高めています。すなわち、説教が行われた場所についてです。ランスの年代記(あるいは、マリノ・サヌードのバージヨン)から、アツコルティは、演説が教会の中ではなく、屋外で開催されたことを知っていました。ここからこの人文主義者は、この語りに介入し、ウルバヌス二世に市内の広場ではなく、都市の外で演説をさせたのです (*pontifex... extra urbem... disseruit*)⁽⁵⁷⁾。

『ゴドフロワの歴史』は、ドイツ語圏で大いに普及しました。おそらく、一九世紀にハインリヒ・フォン・ジーベルが十字軍史を執筆するための史料調査にさいして、広く知られるようになったものと考えられます。ベネデット・アツコルティを明示的に引き合いに出してはいませんが、ジーベルは、教皇が都市の門の前で、ヨーロッパ中の民族からなる集会で語っているという、アツコルティとかなり似通ったシーンを描写しています。教会史家のカール・フオン・ヘーフェレもまた、中世の都市にはウルバヌス二世

の聴衆団を収容するほどの十分な空間がある広場はなかったと述べており、アツコルティから着想を得たものと思われる。ヘーフェレは、地域史研究の成果を踏まえ、教皇の十字軍演説がクレルモンの北東、一一世紀にはまだ都市壁の外に位置しており、当時「ヘルメスの平地 (*Champ hernu*)」と呼ばれていた「リール広場 (*Place Delille*)」で行われたと同定しています。最新の研究成果に至るまで、教皇が「クレルモンの市外に広がる野原」で説教したという想定が続いているのです。

三

以上の論述から、結論として、イタリアの人文主義者たちが、様々な観点において、近代におけるクレルモンの宗教会議イメージを特徴づけているということを確認することができました。彼らは、修道士ロベールの宗教会議の記録を近代的な歴史叙述に持ち込んだのです。だからこそ、戦いを前にした古代の軍総帥よろしくウルバヌス二世がクレルモンに登場する場面から始まるものが圧倒的に多いのです。教皇は戦いの演説を行ったのであり、ローマの軍総帥にふさわしく、戦士たちの戦いのスローガンを「神が欲し給うた」と定めたのです。クレルモンでのこの叫びにつ

修道士ロベール、イタリアの人文主義者たち、クレルモンの宗教会議（一〇九五年）（シュトラック）

場所が突き止められるまでになったのです。

いて記録しているのは、修道士ロベールだけです。この叫びの存在を『フランク人の事績』で知ったロベールは、それを宗教会議の場面にねじ込んだと考えることができません。フラヴィオ・ビオンドは、この戦いの叫びの語気をさらに強め、聴衆についても『エルサレム史』の語りに手を加えました。すでにランスの年代記でも、教皇はガリアとゲルマニアからの聴衆たちに語り掛けていましたが、『数十年の歴史』では、修辞上の敷衍の規則にならって、ヨーロッパ中の諸民族からなる集団にまで誇張されました。修道士ロベールによると十字軍への参加が許されていた女性たちも、一五世紀以降、もはや教皇の聴衆グループに含まれることはなくなりました。この点でも、一部の研究は現在でも、中世盛期の史料よりも人文主義者たちの解釈にしたがっているのです。

ランスの修道士ロベールには、十字軍演説の特別な意味をはっきりと示すために、舞台設定をクレルモンの広場（あるいは大通り）にするだけで十分でした。フィレンツェの人文主義者ベネデット・アッコルティは、『エルサレム史』に学んだだけでなく、『数十年の歴史』からも、全ヨーロッパからの大群の訪問者について読み知っていました。こうして一四六三年以来、ウルバヌス二世は、都市の外の野原で説教するようになり、一九世紀には、より正確にその

*本稿は、筆者が二〇一七年七月にルートヴィヒ・マクシミリアン大学（ミュンヘン）の歴史・芸術学部に提出した教授資格取得論文（Solo sermone: Überlieferung und Deutung politischer Ansprachen der Päpste im Mittelalter）の一部に基づいています。

- (1) Robert Somerville, *The Councils of Urban II*, vol.1 *Decreta Claromontensi*, Annuarium Historiae Conciliorum: Supplementum, 1, Amsterdam, 1972; Odette Pontal, *Les conciles de la France capétienne jusqu'en 1215*, Paris, 1995, pp. 224-33.
- (2) 例へば Thomas Asbridge, *The First Crusade: A New History, The Roots of Conflict between Christianity and Islam*, Oxford, UK, 2004, pp. 31-39; Jay Rubenstein, *Armies of Heaven: The First Crusade and the Quest for Apocalypse*, New York, 2011, pp. 22-30; Peter Frankopan, *The First Crusade: The Call from the East*, London, 2012, pp. 1-3.
- (3) Benoit Lacroix, “Deus le volt! La théologie d'un cri,” in *Études de Civilisation Médiévale (IX^e-XIV^e siècles): Melanges offerts à Edmond-René Labande*, Poitiers, 1974, pp. 461-70.
- (4) 彼の史観については Dana C. Munro, “The Speech of Pope Urban II at Clermont 1095,” *The American Historical Review*, 11, 1906, pp. 231-242; Georg Strack, “The Sermon of Urban II in Clermont and the Tradition of Papal Oratory,” *Medieval Sermon Studies*, 56, 2012, pp. 30-45. また以下の研究書の該当論考も参照。 Alfons Becker, *Papst Urban II. (1088-1099)*, 3 vols, MGH Schriften 19, Stuttgart, 1964-2012, 2 (1988) *Der Papst, die griechische Christenheit und der Kreuzzug*; Penny J. Cole, *The Preaching of the Crusades to the Holy Land*, 1095 - 1270, Medieval Academy Books 98, Cambridge, MA, 1991; Jonathan Riley-Smith, *The First Crusade and the Idea of Crusading*, 2nd ed, London, 2009; Idem, *The First Crusaders 1095-1131*, Cambridge, 1997; Jean Flori, *Prêcher la croisade (XIe-XIIIe siècle): Communication et propagande*, Paris, 2012.
- (5) 最新の刊本は、一八六六年版を新たに復刻したものであり、旧版からの大きな変更点は見られませぬ。 *The Historia Hierosolimitana of Robert the Monk*, (ed.) Damien Kempf and Marcus Bull, Woodbridge, 2013. 作題と著者については復刻版の序論 (ibd., pp. ix-xli) の脚注で以下の文献も参照。 Carol Sweetenham, “Robert the Monk,” in *The Encyclopedia of the Medieval Chronicle*, (ed.) Graeme Dunphy, Leiden, 2010, p. 1287; Jean Flori, *Chroniqueurs et propagandistes: Introduction critique aux sources de la Première croisade*, Hautes études médiévales et modernes 98, Genf, 2010, pp. 125-142; Georg Strack, “Wie der Kreuzzug zum Abenteuer wurde: Die Chronik des Robertus Monachus,” in *Abenteuer: Zur Geschichte eines paradoxen Bedürfnisses*, (ed.) Nicolai Hannig and Hiram Kümper, Paderborn, 2015, pp. 83-104; Kristin Skotki, *Christen, Muslime und der Erste Kreuzzug: Die Macht der Beschreibung in der mittelalterlichen und modernen Historiographie*, Cultural encounters and the discourses of scholarship 7, Münster, 2015, pp. 329-55.
- (6) 以下の脚注も参照。 *Historia Hierosolimitana*,

修道士ロムール、イタリアの人文主義者たち、クレルモン¹⁾の宗教会議(一〇九五年)(シュトラック)

pp. xvii–xxxiii; Luigi Russo, “Ricerche sull’*Historia Hierosolimitana* di Roberto di Reims,” *Studi Medievali*, 43, 2002, pp. 651–91 (pp. 651–52). 幾疑ゆなは、Flori, *Chroniqueurs et propagandistes*, pp. 125–26; *Robert the Monk’s History of the First Crusade*, (trans.) Carol Sweetenham, *Crusade Texts in Translation* 11, Aldershot, 2005, pp. 1–4; ロムールと名²⁾の聖人の修道院長が巻を込められたゆる紛争のごとくは、Becker, *Papst Urban II. (1088–1099)*, 3, pp. 428–31.

(7) 成立時期を一〇六十年頃とみなす納得せざる論拠のごとくは、Flori, *Chroniqueurs et propagandistes*, pp. 129–30; *Robert the Monk’s History*, p. 7. 一〇一〇年と云ふなごころのなは、*Historia Hierosolimitana*, pp. xxiv–xli; それごころの批判は、Jay Rubenstein, “The Deeds of Bohemond: Reform, Propaganda, and the History of the First Crusade,” *Viator*, 47, 2016, pp. 113–35 (p. 119).

(8) *Historia Hierosolimitana*, p. 3. 1) の系統的な論争句のごとくは、Gertrud Simon, “Untersuchungen zur Topik der Widmungsbriefe mittelalterlicher Geschichtsschreiber bis zum Ende des 12. Jahrhunderts. Erster Teil.” in *Archiv für Diplomatik*, 4, 1958, pp. 52–119 (p. 68). 依頼をした修道院長が Baudri de Bourgueil によつた可能性を指摘するのなは、*Historia Hierosolimitana*, pp. xxvi–xxxiii. ロムールが Baudri と知人関係にありたは、*Robert the Monk’s History*, pp. 3–4; Russo, “Ricerche sull’*Historia Hierosolimitana*,” p. 653; Cole, *The Preaching of the Crusades*, pp. 15–16; それに對しローレンスタインは、³⁾

ンテ・カミーノ⁴⁾修道院長 Bruno von Segni が依頼人であること。Rubenstein, “The Deeds of Bohemond,” p. 134.

(9) *Gesta Francorum et aliorum Hierosolimitanorum: The Deeds of the Franks and the other Pilgrims to Jerusalem*, (ed.) Rosalind Hill, *Medieval Texts* 17, London, 1962. 『フランク人の事績』を参照したと云ふ年代記作家自身の注釈は、*Historia Hierosolimitana*, p. 3. 4. 1) *ibid.*, pp. xii–xiii.

(10) *Historia Hierosolimitana*, p. 4. Cf. Simon, “Untersuchungen zur Topik. Erster Teil,” p. 71, p. 80; Gertrud Simon, “Untersuchungen zur Topik der Widmungsbriefe mittelalterlicher Geschichtsschreiber bis zum Ende des 12. Jahrhunderts: Zweiter Teil,” *Archiv für Diplomatik*, 5/6, 1959/60, pp. 73–153 (pp. 101–102).

(11) Cf. Simon, “Untersuchungen zur Topik, Zweiter Teil,” p. 89–90; Thomas M. Buck, “Von der Kreuzungsgeschichte zum Reisebuch: Zur *Historia Hierosolymitana* des Robertus Monachus,” *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, 76, 2002, pp. 321–55 (p. 338); Elizabeth Lapina, “‘Nec signis nec festibus creditur ...’: The Problem of Eyewitnesses in the Chronicles of the First Crusade,” *Viator*, 38, 2007, pp. 117–39 (p. 139).

(12) 1) の註を回るとごとくは、Simon, “Untersuchungen zur Topik. Erster Teil,” pp. 78–79.

(13) *Historia Hierosolimitana*, pp. 5–8. 宗教会議の記録に

- らした’ Russo, “Ricerche sull’Historia Iherosolimitana,” pp. 655–63; Fiori, *Chroniqueurs et propagandistes*, pp. 130–37; Idem., *Précher la croisade*, pp. 90–91 など、以下続く注記を参考。
- (14) *Historia Iherosolimitana*, p. 5 “Concilium celebratum est, in Alvernia in civitate que Clarus Mons appellatur. Cui papa Urbanus secundus cum Romanis episcopis et cardinalibus prefuit. Fuit autem illud concilium valde celeberrimum conventu Gallorum ac Germanorum, tam episcoporum quam et principum.”
- (15) *Historia Iherosolimitana*, p. 5.
- (16) *Historia Iherosolimitana*, p. 7.
- (17) *Historia Iherosolimitana*, p. 6.
- (18) *Historia Iherosolimitana*, pp. 6–7. 比喩と人格化となふたべ’ 結句讀み并田に値じ共十’ “Arripite igitur viam hanc in remissione peccatorum vestrorum, securi de immarcescibili gloria regni celorum.”
- (19) *Historia Iherosolimitana*, p. 6. かの観点にこうした’ Riley-Smith, *The First Crusade*, pp. 146–48; Idem., *The First Crusaders*, pp. 62–65.
- (20) *Historia Iherosolimitana*, p. 7. Cf. Russo, “Ricerche sull’Historia Iherosolimitana,” pp. 659–60; Ane L. Bysted, *The Crusade Indulgence: Spiritual Rewards and the Theology of the Crusades, c. 1095–1216*, History of Warfare 103, Leiden, 2015, p. 48.
- (21) *Historia Iherosolimitana*, p. 7. Cf. Robert Somerville, “The Council of Clermont and the First Crusade,” *Studia*

- Gratiama*, 20, 1976, pp. 325–337 (pp. 332–334).
- (22) 似たような参加条件についてマルクスと二世は、ボローニャ(一〇九六年九月一日; IL 5670) およびヴァロロブローサ(一〇九六年一〇月九日)に宛てた手紙のなかで言及しつつある。Cf. Georg Strack, “Pope Urban II and Jerusalem: a re-examination of his letters on the First Crusade,” *The Journal of Religious History, Literature and Culture*, 21, 2016, pp. 51–70 (pp. 52–56).
- (23) *Historia Iherosolimitana*, p. 7. Sweetenham は、自身の翻記書のなかで (*Robert the Monk’s History*, p. 81) ‘この言葉が男性の同伴者 (“legitimate guarantor”) を意味している」と述べています。多くの研究者がこの解釈に従い、マルクスと二世が一修道士ロベールによる唯一同伴者のいない女性の十字軍参加を禁止したと主張していますが、これは誤りです。それに対し、Sabine Geldsetzer は、*legitima testimonia* をよりの確に「法的な証明書 (“gesetzlichen Ausweise”）」と訳し、当該女性が住むべき「管轄区」の司祭ならは司教による同意を意味しつつある」と推測しています。この点はあらに議論が深められるべきでしょう。Sabine Geldsetzer, *Frauen auf Kreuzzügen 1096–1291*, Darmstadt, 2003, p. 35. Alan V. Murray は、実際に夫に付加添って十字軍に参加した貴族女性を列挙しつつあります。Alan V. Murray, “Sex, death and the problem of single women in the armies of the First Crusade,” in *Shipping, Trade and Crusade in the Medieval Mediterranean. Studies in Honour of John Pryor*, (ed.) Ruthy Gertwagen and Elizabeth Jeffreys, Farnham, 2012, pp. 255–70 (p.

修道士ロムール、イタリアの人文主義者たち、クレルモンの宗教会議（一〇九五年）（シエトラック）

- 258).
- (24) *Historia Hierosolimitana*, p. 8.
- (25) 1)の特長については Robert Somerville, “Adhemar of Le Puy: Pappal Legate on the First Crusade,” in *Law as Profession and Practice in Medieval Europe: Essays in Honor of James A. Brundage*, (ed.) Kenneth Pennington and Melodie Harris Eichbauer, Farnham, 2011, pp. 371–85.
- (26) 例として Sophia Menache, “Emotions in the Service of Politics: Another Perspective on the Experience of Crusading (1095–1187),” in *Jerusalem the Golden: The Origins and Impact of the First Crusade*, (ed.) Susan B. Edgington and Luis García-Guijarro, Outremere: Studies in the Crusades and the Latin East 3, Turnhout, 2014, pp. 235–54 (p. 242). 「ロマンの年代記は『ロマンティスム』の観点からみて、決定的に重要である。そのなかには、教皇に聴衆たちの完全な同時性が、教皇の呼び掛けに非常にポジティブな応答を表明する聴衆たちの動員によって、良く反映されつづるからである」。
- (27) Karl-Friedrich Krieger, “Papst Urban II.: Aufruf zum Kreuzzug (1095),” in *I have a dream: Große Reden von Perikles bis Barack Obama – Von der Antike bis heute*, (ed.) Kai Brodersen, 2nd ed., Darmstadt, 2009, pp. 28–44 (p. 28).
- (28) 例として Arno Borst, *Lebensformen im Mittelalter*, 2nd ed., Berlin, 1999, pp. 320–22.
- (29) 1) については Robert Payne, *Die Kreuzzüge: Zweihundert*

Jahre Kampf um das Heilige Grab, aus dem Amerikanischen von Hans Marfurt, Zürich, 1986, p. 30; Asbridge, *The First Crusade*, p. 1; Jonathan Phillips, *Heiliger Krieg: Eine neue Geschichte der Kreuzzüge, aus dem Englischen von Norbert Juraschitz*, München, 2011, p. 23; Klaus Herbers, *Geschichte des Papsttums im Mittelalter*, Darmstadt, 2012, pp. 138–39.

(30) Cole, *The Preaching of the Crusades*, p. 15.

- (31) Strack, “The Sermon of Urban II,” pp. 34–36. シヤハンマンの文章は、中世総論の巻頭として、Julia Knödler, “Rhetorik mit Todesfolge: Diversitätskonstruktionen in mittelalterlichen Feldherrnreden am Beispiel der Rede Wilhelms des Eroberers vor der Schlacht bei Hastings,” in *Rhetorik in Mittelalter und Renaissance. Konzepte – Praxis – Diversität*, (ed.) Georg Strack and Julia Knödler, Münchner Beiträge zur Geschichtswissenschaft 6, München, 2011, pp. 167–90 (pp. 171–73); Jan-Erik Henneke, “*His optimis verbis erecti milites*?: Studien zu herrschaftlichen Schlachtsprachen im frühen und hohen Mittelalter, Studien zur Geschichtsforschung des Mittelalters 34, Hamburg, 2017.
- (32) Cf. Lacroix, “La théologie d’un cri,” p. 461. 中世の戦いを知るべきは、その『中世史』の註釈を参照。‘Vocalia [signal] dicuntur quae voce humana pronuntiantur, sicut in uigiliis uel in proelio pro signo dicitur, ut puta ‘uictoria’ ... et alia quaecumque uoluerit dare is, qui in exercitum habet maximam potestatem [Veg. mil. 3, 5].’

- (33) *Historia Iherosolimitana*, p. 5. ‘トヘン語記’⁴ Krieger, ‘Papst Urban II.’ p. 42–43. ‘この印象的な文章はトヘン’⁴ Menache, “Emotions in the Service of Politics,” p. 241–42.
- (34) *Historia Iherosolimitana*, p. 6.
- (35) Cf. Becker, *Papst Urban II.*, 2, pp. 400–402; *Robert the Monk’s History*, pp. 61–63; Jean Flori, *Croisade et chevalerie, XI–XII siècles*, Paris, 1998, p. 236; Matthew Gabriele, *An Empire of Memory: The Legend of Charlemagne, the Franks, and Jerusalem before the First Crusade*, Oxford, 2011, pp. 65–66.
- (36) *Gesta Francorum*, pp. 1–2. Cf. Strack, “Wie der Kreuzzug zum Abenteuer wurde,” p. 93.
- (37) *Historia Iherosolimitana*, p. 5 “Gens Francorum, gens transmontana, gens, sicuti in pluribus vestris elucet operibus, a Deo electa et dilecta, tam situ terrarum quam fide catholica, quam honore sancte ecclesie ab universis nationibus segregata: ad vos sermo noster dirigitur vobisque nostra exhortatio protenditur.” Cf. *Robert the Monk’s History*, pp. 51–52.
- (38) 『フランク人の事績』における言葉使ったトヘン’⁴ Timo Kirschberger, *Erster Kreuzzug und Ethnogenese: ‘In novam formam commutatus’ – Ethnogenetische Prozesse im Fürstentum Antiochia und im Königreich Jerusalem*, Nova Mediaevalia: Quellen und Studien zum europäischem Mittelalter 13, Göttingen, 2015, pp. 80–81. 全般的に Bernd Schneidmüller, *Nomen patriae: Die*

Entstehung Frankreichs in der politisch-geographischen Terminologie (10–13. Jahrhundert), Nationes 7, Sigmaringen, 1987, pp. 106–107.

- (39) *Historia Iherosolimitana*, p. 4. Cf. Schneidmüller, *Nomen patriae*, p. 122. 自前の引用はトヘン’⁴ Munro, “The Speech of Pope Urban II,” p. 240; *Robert the Monk’s History*, pp. 51–52.
- (40) 『ナカヨリス強者書』(一四二七)からの引用は *Historia Iherosolimitana*, pp. 7–8 “Et qui non bajulat cruce[m] suam, et venit post me, non potest meus esse discipulus.” 『フランク人の事績』の冒頭の韻文を参照。*Gesta Francorum*, p. 1 “Si quis vult post me venire, abneget semetipsum, et tollat cruce[m] suam quotidie, et sequatur me” (Math. 16, 24 bzw. Luc. 9, 23).
- (41) *Gesta Francorum*, p. 7 “.. sonum vero ‘Deus vult, Deus vult, Deus vult!’ una voce conclamant.”
- (42) キント・カミンナーの修道院年代記 (*Die Chronik von Montecassino*, ed.) Hartmut Hoffmann, MGH SS 34, Hannover, 1980, p. 475) は、この戦いの叫びが、フランク人の十字軍参加者たちの一般的な決意表明に由来するであろうと述べている。“Paulatin igitur ab uno ad alterum et a provinciis ad provincias verbo huiusmodi volitante incredibile est, ad quantam multitudinem brevi tempore conspiratio ipsa pervenerit. Ad iudicium autem evidens ac speciale huius expeditionis communi consilio in vestibus suis dextera scapula signum sancte crucis undecumque fecerunt assuere et simul altis vocibus

修道士ロムール、イタリアの人文主義者たち、クレルモンの宗教会議（一〇九五年）（シエトラック）

Deus lo volt. Deus lo volt, Deus lo volt' per totum iter decreverunt frequentius inclamare.” この点については『フランス人の事績』の初期の改訂版が存在していた可能性もありますが、いずれにせよ共通する原本にどれほど依拠していたのかについても研究者のあいだで議論がわかれつつあります。 Cf. *ibid.*, pp. XXVIII–XXX; Luigi Russo, “The Monte Cassino Tradition of the First Crusade: From the *Chronica Monasterii Cassinensis* to the *Hystoria de Via et Recuperatione Antiochie atque Ierosulymarum*,” in *Writing the early crusades: Text, transmission and memory*, (ed.) Marcus Bull and Damien Kempf, Woodbridge, 2014, pp. 53–62 (pp. 57–58).

(43) 例えは René Grousset, *Histoire des croisades et du royaume Franc de Jérusalem*, 3 vols, Paris, 1934–1936, 1, p. 4 「群衆たちの「神が欲し給いた Deus lo volt!」とよく叫びは、教皇の言葉が民衆の止むべきことの知らぬ運動を導いたことを証明しようとする」。同様な見解は Hans Eberhard Mayer, *Geschichte der Kreuzzüge*, 10th ed., Urban Taschenbücher 86, Stuttgart, 2005, p. 19.

(44) Cf. Strack, “Pope Urban II and Jerusalem,” pp. 59–60. (45) *Historia Iherosolimitana*, p. 5. 一致箇所論拠は以下の作品の解説を参照。 *Epistulae et chartae ad historiam primi belli sacri spectantes quae supersunt aequo aequalis ac genuinae: Die Kreuzungsbriefe aus den Jahren 1088–1100, eine Quellensammlung zur Geschichte des Ersten Kreuzzugs*, (ed.) Heinrich Hagemeyer, Innsbruck, 1901, p. 136, pp. 210–11, n. 4–6.

(46) *Historia Iherosolimitana*, pp. 6–7. Cf. *Epistulae et chartae*, p. 136, p. 211, n. 8 and n. 14; Somerville, “Adhemar of Le Puy,” p. 376.

(47) *Epistulae et chartae*, pp. 129–36. 作成年代については論争がある一方で、この手紙が偽造であることはすでに確定されている。 Christian Gastgeber, “Das Schreiben Alexios' I. Komnenos an Robert I. von Flandern: Sprachliche Untersuchung,” in *Documenti medievali Greci e Latini: Studi comparativi*, (ed.) Giuseppe de Gregorio and Otto Kresten, Incontri di studio 1, Spoleto, 1998, pp. 141–85; Peter Schreiner, “Der Brief des Alexios I. Komnenos an den Grafen Robert von Flandern und das Problem gefälschter byzantinischer Kaiserschriften in den westlichen Quellen,” in *ibid.*, pp. 111–40; Flori, *Chroniqueurs et propagandistes*, p. 152, n. 33; Nicholas L. Paul, “A Warlord's Wisdom: Literacy and Propaganda at the Time of the First Crusade,” *Spectulum* 85, 2010, pp. 534–66 (p. 544). 研究上は、修道士ロムールがこの手紙を引用していることは周知の事実となっていますが、そこから例えば作者自身が伝えるように「証言記録」であつたかどうかにあつて推論することは難しいのが現状です。 Cf. Munro, “The Speech of Pope Urban II,” pp. 234–35; Robert la Moine's *History*, p. 43, pp. 215–18; Flori, *Præcher la croiske*, pp. 90–91.

(48) 例えは、一一二〇年頃にフランス王年代記を起草した Hugo von Fleury の年代記では、ウルバヌス二世の十字軍演説は「アレクシオスの手紙」からの意識となつていませ

- Cf. *Hugonis liber qui modernorum regum Francorum continet actus*, (ed.) Georg Waitz, MGH SS 9, Hannover, 1851, pp. 376–95 (pp. 392–93). なるべくハイヤーの解説を参照。 *Epistolae et chartae*, p. 11.
- (49) *Historia Hierosolimitana*, pp. 5–6. Cf. *Epistolae et chartae*, pp. 131–33.
- (50) *Historia Hierosolimitana*, p. 7. Cf. *Epistolae et chartae*, pp. 146–49; 伝来状況については *ibid.*, pp. 68–69. それによるローネル写本のなかには、明らかにローネルの年代記に引き継がれた主題が含まれている総大司教の手紙の第二部が欠けている断章がいくつも見つかることがあります。 Cf. auch Russo, “Ricerche sull’*Historia Hierosolimitana*,” p. 659, n. 37; *Robert the Monk’s History*, p. 43, p. 222.
- (15) *Historia Hierosolimitana*, p. 7. Cf. *Epistolae et chartae*, p. 148.
- (52) *Epistolae et chartae*, p. 148. Cf. *Robert the Monk’s History*, p. 81, n. 14.
- (53) 伝来状況については、上記註四七、五〇を参照。
- (54) Cf. Flori, *Chroniqueurs et propagandistes*, pp. 129–30; *Idem.*, *Bohémund d’Antioche: Chevalier d’Aventure*, Paris, 2007, pp. 241–73; Luigi Russo, “Il viaggio di Boemondo d’Altavilla in Francia (1106): un riesame,” *Archivio Storico Italiano*, 163, 2005, pp. 3–42.
- (55) *Historia Hierosolimitana*, pp. xxxv–xli; Paul, “A Warlord’s Wisdom,” pp. 561–66. けれど批判的なのは Rubenstein, “The Deeds of Bohemond,” pp. 119–21.
- (56) 『エルサレム史』の解説を参照。 *Historia Hierosolimitana*, pp. lxiii–lxix.
- (52) Damien Kempf, “Towards a textual archeology of the First Crusade,” in *Writing the early crusades: Text, transmission and memory*, (ed.) Marcus Bull and Damien Kempf, Woodbridge, 2014, pp. 116–26 (pp. 122–23). Cf. シーターと Gunther von Paris の 1180/81 年に撰文化された年代記の断片を参照。 Guntherus de Paris, *Solymanus*, http://www.geschichtsquellen.de/repOpus_02554.html [最終閲覧二〇一八年三月二八日]
- (58) Strack, “Wie der Kreuzzug zum Abenteuer wurde,” pp. 101–102.
- (59) Cf. *Historia Hierosolimitana*, pp. xv–xvi; Kempf, “Towards a textual archeology,” p. 126; Jürgen Dendorfer, “Barbarossa als Kreuzfahrer im Schäftlarnner Codex,” in *Barbarossabilder: Entstehungskontexte, Erwartungshorizonte, Verwendungszusammenhänge*, (ed.) Knut Görlich and Romedio Schmitz-Esser, Regensburg, 2014, pp. 160–74.
- (60) Marino Sanudo, *Liber secretorum fidelium crucis*, in *Gesta Dei per Francos sive orientaliū expeditionum et regni Francorum Hierosolimitani historia*, 2 vols, (ed.) Jacques Bongars, Hannover, 1611, 2, pp. 1–288 (p. 131). 本作品の作者については Antony Leopold, *How to Recover the Holy Land: The Crusade Proposals of the Late Thirteenth and Early Fourteenth Centuries*, Aldershot, 2000, pp. 39–40; Christopher Tyerman, “Sanudo, Marino (d. 1343),” in *The Crusades: an Encyclopedia*, 4 vols, Santa

修道士ロムール、イタリアの人文主義者たち、クレルモン¹の宗教会議（一〇九五年）（シュートラック）

Barbara, 2006, 4, pp. 1073–1074; Idem., *The Debate on the Crusades*, Manchester, 2011, p. 27.

- (16) Metellus von Tegernsee の 4 冊 特約な改訂（一―一五〇―一五五年）の 1 冊 だけ *Expediit Ierosolimiana*, (ed.) Peter C. Jacobsen, Quellen und Untersuchungen zur lateinischen Philologie des Mittelalters 6, Stuttgart, 1982; Metellus Tegernsensis, *Expediit Ierosolimiana*, http://www.geschichtsquellen.de/repOpus_03410.html 【最終閲覧二〇一八年三月二八日】。

- (17) *Historia Nicæna vel Antiochena*, (ed.) Edmond Martène, in *Recueil des historiens des croisades: Historiens occidentaux*, 5 vols, Paris, 1844–1895, 5, pp. 133–85. Cf. Fulcherus Carnotensis, *Historia Hierosolymitana: Mit Erläuterungen und einem Anhang*, (ed.) Heinrich Hagenmeyer, Heidelberg, 1913, pp. 83–84; Kirsberger, *Erster Kreuzzug und Ethnogenese*, pp. 68–69.

- (18) *Historia Nicæna vel Antiochena*, pp. 141–42. 挿話だけ “O fortissimi milites de nobili genere Francorum!” の 5 冊 並心 挿話 からの 始め だけ だけ。

- (19) 批判的な校訂版がなく、以下では Flavius Blondus, *Historiarum ab inclinato Romano imperio decades tres*, Basel, 1559 からの引用に拠ります。本作品は作者の 1 冊 だけ VDI6 B 5538; Ottavio Clavuot, “Biondo, Flavio (Flavius Blondus),” in *The Encyclopedia of the Medieval Chronicle*, (ed.) Graeme Dunphy, Leiden, 2010, pp. 180–81; Elisabetta Guerrieri, “Blondus Flavius,” *Compendium Auctorum Latinorum Medii Aevi*, 2, 2008, pp. 420–25 (pp.

422–23); Ricardo Fubini, “Biondo, Flavio,” *Dizionario Biografico degli Italiani*, 10, 1968, pp. 536–59.

- (20) *Historiarum decades tres*, pp. 207–208. 1 冊 の 1 冊 だけ の 記述 だけ 1 冊 だけ Dieter Mertens, “*Claromontani passagii exemplum*: Papst Urban II. und der Erste Kreuzzug in der Türkenkriegspropaganda des Renaissancehumanismus,” in *Europa und die Türken in der Renaissance*, (ed.) Bodo Guthmüller and Wilhelm Kühlmann, Frühe Neuzeit 54, Tübingen, 2000, pp. 65–78; Peter Orth, “Papst Urbans II. Kreuzzugsrede in Clermont bei lateinischen Schriftstellern des 15. und 16. Jahrhunderts,” in *Jerusalem im Hoch- und Spätmittelalter: Konflikte und Konfliktbewältigung – Vorstellungen und Vergewewärtigungen*, (ed.) Dieter Bauer, Klaus Herbers and Nikolaus Jaspert, Campus Historische Studien 29, Frankfurt, 2001, pp. 367–405 (pp. 372–76); Margaret Meserve, “Italian Humanists and the Problem of the Crusade,” in *Crusading in the Fifteenth Century: Message and Impact*, (ed.) Norman Housley, Basingstoke, 2004, pp. 13–38 (pp. 23–24); Nancy Bisaha, *Creating East and West: Renaissance Humanists and the Ottoman Turks*, Philadelphia, 2004, p. 25.
- (21) エントナカ 図書館 所蔵 の 1 冊 の 1 冊 だけ Vatikan, Biblioteca Apostolica Vaticana, MS Codd. Vat. Lat. 1795 and 2005, cf. Ottavio Clavuot, *Biondos Italia Illustrata – Summa oder Neuschöpfung? Über die Arbeitsmethode eines*

- Humanisten*, Bibliothek des deutschen historischen Instituts in Rom 69, Tübingen, 1990, pp. 259–64, p. 353; *Historia Hierosolimitana*, pp. lxxii.
- (97) *Historiarum decades tres*, p. 207.
- (98) *Historiarum decades tres*, p. 207 B–C. Cf. *Historia Hierosolimitana*, p. 5. 以下の刊本では、改訂のごとく本文中の種かこが言及やえづらぬ。Paul Buchholz, *Die Quellen der Historiarum decades des Flavius Blondus*, Leipzig, 1881, pp. 78–79.
- (99) *Historiarum decades tres*, p. 207 B–C. Cf. *Historia Hierosolimitana*, p. 5.
- (10) *Historiarum decades tres*, p. 207 C–D “Abacta inde Christiani [I] pars fragilis et cruciatuum impatiens, salutis abhuncians circumciso praeputio facta est Saracena: pars in fide constans per varios mortis modos lacerati laniatique sunt, ut felix fuerit quem carnifex appetitum gladio obruncavit.” ヤミヨイテ 『ハナハナイテ』の體骨を描きた。 *Historia Hierosolimitana*, p. 5.
- (11) *Historiarum decades tres*, p. 207 “Mulieres uero Christianae, quas ... deuotio ad sancta inspicenda et osculanda, adorandaque loca per tot mania, tot terras atraxerat, omnia passè sunt, què ... Christi hostis non ad suam magis explendam libidinem quam ad Christianorum dedecus excogitare potuit.” Cf. *Historia Hierosolimitana*, p. 5.
- (12) *Historiarum decades tres*, p. 207 C–D “Ea si Christiani, imo si estis uiri, nec aequo audire animo, nec potestis
- cum patientia tolerare.” 古典文学で広く見られる「男の名譽 (männliche Ehre)」の語彙のごとく、Carlin A. Barton, *Roman Honor: The Fire in the Bones*, Berkeley, 2001, pp. 38–41.
- (13) *Historiarum decades tres*, pp. 207–208 D–E.
- (14) Cf. *Historia Hierosolimitana*, p. 5.
- (15) *Historiarum decades tres*, p. 208 E–F. Cf. Orth, “Papst Urbans II. Kreuzzugsrede”, pp. 375–76; Meserve, “Italian Humanists”, pp. 23–24.
- (16) *Historiarum decades tres*, p. 208 F–G. Cf. *Historia Hierosolimitana*, p. 6; 人文主義的な (十字軍) 歴史叙述におけるカール大帝の例話のごとく、Bisaha, *Creating East and West*, pp. 30–42.
- (17) Cf. Meserve, “Italian Humanists”, p. 23.
- (18) *Historiarum decades tres*, p. 208 G–H. Cf. *Historia Hierosolimitana*, pp. 6–7.
- (19) *Historiarum decades tres*, p. 208 H “Pontifice adhuc dicturante, vox omnium, dictum mirabile, unio ut apparuit ore prolata intonuit ‘Deus vult, Deus vult. Ad quam vocem quum pontifex] pusillum tacuisset, illique viderentur iterata ter quaterque verba repetituri, eis, ut tacerent manu significavit et gratiis deo actis, qui tot populorum mentes in sua flexisset beneplacita, subiunxit, viri fortes, ea quae dominus in os vestrum posuit verba, vobis in bello pro tessera erunt” Cf. *Historia Hierosolimitana*, p. 7; 引用の論拠は、Orth, “Papst Urbans II. Kreuzzugsrede”, p. 375.

- (80) *Historiarum decades tres*, p. 208 H. Cf. *Historia Herosolimiana*, p. 7.
- (81) 『数十年の歴史』の正確状況に「さうして」Clavot, *Biondas Italia Illustrata*, pp. 2-3; Orth, “Papst Urban II. Kreuzzugsrede,” p. 376; Uta Goerlitz, “... sine diuino verborum splendore ... : Zur Genese frühneuzeitlicher Mittelalter-Rezeption im Kontexte humanistischer Antike-Transformation: Konrad Peutinger und Kaiser Maximilian I.,” in *Historiographie des Humanismus: Literarische Verfahren, soziale Praxis, geschichtliche Räume*, (ed.) Johannes Helmraath, Albert Schirrmester and Stefan Schlelein, Transformationen der Antike 12, Berlin, 2013, pp. 85-110, pp. 92-93.
- (82) *Supra decades Blondi ab inclinatione imperii usque ad tempora Iohannis uicesimi tertii pontificis maximi epitone, in Aeneae Sylui Piccolomini Senensis, qui post adeptum pontificatum Pius eius nominis secundus appellatus est, Opera quae extant omnia*, Basel, 1551, pp. 144-280 (p. 209) “Urbanus secundus apud Clarummontem consilium habens, expeditionem in Saracenos pro Hierosolyma recuperanda persuasit, anno quarto et octuagesimo supra milesimum et trecenta hominum millia cruce signati.”
- (83) *Oratio Pii papae secundi habita in conuentu Mantuano sexto calendae Octobris anno domini MCCCCLIX, Cum bellum hodie, in Aeneae Sylui Piccolomini Senensis, qui post adeptum pontificatum Pius eius nominis secundus appellatus est, Opera quae extant omnia*, Basel, 1551, pp. 905-14 (p. 914) “O si adessent nunc Godfridus, Baldevinus, Eustachius, Hugo magnus, Bohemundus, Tancredus et alii viri fortes, qui quondam Hierosolymam per medias Turcorum acies penetrantes, armis recuperaverunt! Non sinerent profecto tot nos verba facere, sed assurgentes, ut olim coram Urbano secundo praedecessore nostro, Deus vult, Deus vult alacri voce clamarent.” 「○○を越えぬ母本が伝来プリントの「スウーチ」に「ス」を Johannes Helmraath, “Pius II. und die Türken,” in *Europa und die Türken in der Renaissance*, (ed.) Bodo Guthmüller and Wilhelm Kühlmann, Frühe Neuzeit 54, Tübingen, 2000, pp. 79-137 (pp. 95-96); Mertens, “Papst Urban II. und der Erste Kreuzzug,” pp. 75-76; Nancy Bisaha, “Pope Pius II and the Crusade,” in *Crusading in the Fifteenth Century: Message and Impact*, (ed.) Norman Housley, Basingstoke, 2004, pp. 39-52 (p. 43); 現在進中の新校正訂版（英語の対訳付）[※] 『Oratio “Cum bellum hodie” of Pope Pius II (26 September 1459 Mantua), (trans. and ed.) Michael von Cotta-Schönberg, <https://halshs.archives-ouvertes.fr/hal-01184169/document> 【最終閲覧二〇一八年三月二八日】。
- (84) 「これに「さうして」以下の研究が最適です。Orth, “Papst Urban II. Kreuzzugsrede”; Mertens, “Papst Urban II. und der Erste Kreuzzug”。
- (85) Benedictus de Accolis, *Historia Golefridi seu de bello a Christianis contra barbaros gesto pro Christi sepulchro*

- et Iudaea recuperandis*, (ed.) Paul Riant, in *Recueil des historiens des croisades: Historiens occidentaux*, 5 vols. (Paris, 1844–1895), 5, pp. 525–620. 作 品 目 録 詳 見 下 頁 註 ④
- ④ Armando Petrucci, “Accolti, Benedetto,” *Dizionario biografico degli Italiani*, 1, 1960, pp. 99–100; Nicoletta Marcelli, “Benedictus Accolus Aretinus senior,” *Compendium Auctorum Latinorum Medii Aevi*, 2, 2008, pp. 193–94; Robert Black, *Benedetto Accolti and the Florentine Renaissance*, Cambridge, 1985; Orth, “Papist Urbans II. Kreuzzugsrede,” pp. 382–385; Claudio Carpi, “Firenze e la rielaborazione della memoria della crociata: La Historia Golefridi di Benedetto Accolti,” in *I fiorentini alle crociate: Guerre, pellegrinaggi e immaginario ‘orientalistico’ a Firenze tra Medioevo ed Età moderna*, (ed.) Silvia Agnoletti and Luca Mantelli, Florenz, 2007, pp. 244–58; Robert Black, “Benedetto Accolti: A Portrait,” in *Humanism and Creativity in the Renaissance: Essays in Honor of Ronald G. Witt*, (ed.) Christopher S. Celenza and Kenneth Gouwens, Brill’s Studies in Intellectual History 136, Leiden, 2006, pp. 61–83 (pp. 76–77).
- ⑤ Cf. Black, *Benedetto Accolti*, p. 300.
- ⑥ *Historia Golefridi*, p. 536 “Illud vero praecipue queror ... quod silicet ... **templa** dedicata illius nominini vel sunt eversa, vel quae supersunt **prophanatur**.” 『数十年の歴史』のなかの類似の箇所は『*Historiarum decades tres*, p. 207 C–D “... quod sine lachrymis et singultibus dicere

nequiuimus ... **templa** ... ritus nostri aut solo aequata sunt, aut in **prophanos** usus comutata.”

- ⑦ 『チエトロロの歴史』の B–I 部への善念持たず B–C 部へのキリスト教徒の男たが (*virī Christiani*) 以下のは後述男性全般にわたる部への善念持たず (*Historia Golefridi*, p. 537 B–I)。“Ergo, filii mei, **si viri estis**, si Christum putatis Deum esse ... ad hoc opus praeclearum **animos vestros mentesque** dirigite, ac Deo propitio, adversus Barbaros arma capite. Nimis enim has contumelias **tolerastis** ... 『数十年の歴史』のなかの類似の表現は『*Historiarum decades tres*, p. 207 C–D “Ea si Christiani, imo **si estis viri**, nec aequo audire animo, nec potestis cum patientia **tolerare**: in quae omnia, ut **mentem animumque** aduertere et illis pro dignitate nominis Christiani providere velit, maiorum exempla ... ducere magis quam trahere debebunt.”
- ⑧ *Historia Golefridi*, p. 538 D–F. Cf. *Historiarum decades tres*, p. 208 E–F.
- ⑨ *Historia Golefridi*, p. 538 D–E “Pro nobis vero, praecleari duces, ... divinus favor, qui **vobis aderit** pie bellantibus, hostes interimet.” Cf. *Historiarum decades tres*, p. 208 G–H “**Aderit vobis** omnipotens deus”
- ⑩ *Historia Golefridi*, p. 537 J “**Praemia vero** ea sequi, quibus majora nulla omnino esse possunt” Cf. *Historiarum decades tres*, p. 208 G–H “**Praemia vero** expeditionis ... sunt omnium maxima, amplissima et qualia nullo ex alio bello sunt sanae mentis hominibus

